

【研究ノート】

魯迅「藤野先生」ノート

—— トルストイの「ロシアと日本の皇帝にあてた
一通の手紙」をめぐって ——

池澤 實 芳

—

「藤野先生」の中に、解剖学の試験問題漏洩の流言に関わる事件が描かれている。この事件の経緯を時間の流れに従って整理すれば、およそ次の(1)～(10)のようになる。

まず、(1)九月初の新年度開始後一週間が経過して藤野先生が私(魯迅)の解剖学のノートの添削を始める。そして、(2)私はその翌年夏の第一学年次の学年末試験を受験し、夏休みを東京で過ごす。(3)秋の初めに仙台に戻りすでに発表されていた成績結果を知る。(4)第二学年が開始されてまもなくの頃、幹事が同級会開催を知らせる通知を黒板に板書した際に「漏」字の圈点によって謂れ無き私のカンニングを当て擦る。(5)その数日後に学生会の幹事が私の下宿にやってきてノートの検査をする。(6)ノート検査直後、冒頭が「汝悔い改めよ！」で始まる匿名の分厚い「手紙」が郵送される。(7)「手紙」を読んだ私は即このことを藤野先生に報告する。(8)私と同じく承服しかねた数人の友人と共に私は幹事による検査の無礼を問責し、彼らの検査結果の公表を要求する。(9)すると流言が消え、幹事は「匿名の手紙」の回収に全力をあげる。(10)最後に私がこの「トルストイ式の手紙」を幹事に返して事件は終わる。

この一連の事件の中で、(6)の匿名の分厚い「手紙」について描いた「藤野先生」の一節を以下に記せば次のようになる。

しかし、彼らが引き上げて行くや、すぐに郵便配達員が一通の分厚い手紙を届けてきた。封を切って読んでみると、その冒頭には、

「汝、悔い改めよ！」とあった。

これは『新訳』の言葉だと思うが、少し前にトルストイが引用したばかりの言葉である。當時はちょうど日露戦争中で、ト老先生はロシアと日本の皇帝にあてた一通の手紙(一封給俄国和日本の皇帝的信)を書いたのだが、その冒頭がこの言葉だった。日本の新聞は彼の不遜を叱責し、愛国青年も憤慨した。しかし、陰ではとっくに彼の影響を受けていたのである。その次に書かれていたのは、前年度の解剖学試験の問題は、藤野先生がノートに印を付けていたので私が予め知っていた、だからあのような成績が取れたのだ、などというものであった。末尾は匿名であった。

ところで、この「ロシアと日本の皇帝にあてた一通の手紙」に関して、『魯迅全集』3「野草・朝花夕拾・故事新編」（1985年11月、学習研究社）には次のような中国版『魯迅全集』第二巻（人民文学出版社、1981年）の「原注」の邦訳が載せられている。

トルストイがロシアと日本の皇帝にあてた手紙は、一九〇四年六月二十七日付のロンドンの『タイムス』に掲載され、二か月後、日本の『平民新聞』に掲載された。

学習研究社版『魯迅全集』には、この「原注」に関する訂正または訳注はなされていないが、実はこの「原注」は説明不足である。なぜなら、「手紙」は実際には「手紙」ではなく「戦争論」（或いは「戦争観」乃至「非戦論」）として日本にもたらされたからであり、また、「ロシアと日本の皇帝にあてた」という記述は、『タイムス』にも『平民新聞』にも見当らないからである。本稿は、当該部分に関してこれまで幾つかの注釈の作業が行なわれてきた過程で、見逃されてきたこの「手紙」に関するささやかな補正を試みるものである。そこで本稿は、まず、魯迅の「藤野先生」中のトルストイの「ロシアと日本の皇帝にあてた一通の手紙（一封給俄国和日本的皇帝的信）」における「手紙」が実は「手紙」ではなく「戦争論」として邦訳されたことを指摘し、次に、ではなぜ魯迅は「戦争論」ではなく「手紙」と記し、しかもそれを「ロシアと日本の皇帝にあてた」としたのか、また、それに関わって「藤野先生」執筆後の魯迅のトルストイ言及についても併せて考察を加えることを意図する。

なお、この解剖学の試験問題漏洩の流言に関わる事件について一言すれば、起こりそうもない奇怪な事件であったといえよう。なぜなら、これまで指摘されてきたように、魯迅の当該学年の総合成績は進級要件を満たしてはいたが、解剖学そのものの成績は及第していないからである。¹⁾ ただし、強者が弱者に向かってする流言とはたとえ事実無根であっても悪意と作意さえあれば存在しうる性質のものであろうし、また作品の中にはさり気なく描かれているため、あまりこの事件と関わって注目されないが、「幹事等」に代表される日本人学生にしてみればいろいろな面で医専から「優待」されていた魯迅への嫉妬も事件の背景には存在していたものと思われる。しかし、被害者の受けた傷が事実無根であるからといって、その傷が軽微であったとはいえない。むしろ、根も葉もない流言の方が事実に基づくそれよりも深く傷つのが常であらう。この事件は単に日本人学生の中国人蔑視や或いは藤野先生に代表される医専の教職員から「食や住の面倒」及び教育の面でも「優待を受けた」魯迅に対する日本人学生の嫉妬ばかりでなく²⁾、藤野先生の地道な努力に報いられなかったという魯迅自身の負い目も重なっているだけに（作品では及第と記しているが）、二十年が経過し

1) 渡辺襄「魯迅と仙台」（魯迅生誕110周年記念祭実行委員会編『魯迅と仙台・魯迅生誕110周年仙台記念祭展示図録』（1991年9月発行）所収）によれば、「魯迅の成績は7科目平均65.5点、142名中68番であった。解剖学は平均59.3点、丁で及第点に達しなかったが、組織学は72.7点、丙、生理学は63.3点、丙、倫理学は83.0点、乙、独逸学は60.0点、丙、物理学は60.0点、丙、化学は60.3点、丙の成績であった。医専規則によると、丁が2科目以内でそのほかに戊がなければ及第とされたから、進級できた。二年に進級できたのは103名であり、二年級に留年した20名とあわせて二年級は123名であった。」という。

2) 手代木有児編集・解説「図録 魯迅の生涯」（『魯迅と仙台・魯迅生誕110周年仙台記念祭展示図録』所収）の「4-A. 藤野先生が添削した魯迅の解剖学ノート」欄の解説には、「魯迅が仙台医専在学中にとった講義ノート

でも消えずに思い起すという意外なほど深い痕跡を残したものと思われる。

また、トルストイの「心の声」である「戦争論」（作品では「手紙」）が学生会の幹事等の卑劣な「手紙」と対比されているが、もう一面では、非戦論、平和を唱え続けたトルストイの行為への魯迅の共感及びその無抵抗主義という思想乃至方法の無効性と、藤野先生のノート添削の粘り強い行為や一中国人を西洋医に養成しようという願い及びそれを裏切ることになる魯迅の医学放棄とが、対比されているように思われる。一方は著名な文学者による宗教上からの「心の声」の叫び、もう一方は無名の医専の教師による科学者としての粘り強く地道な援助、魯迅は全く異質なこの二人のどこかに共通な相通じる或いはそれぞれに個性的な美質を見ていたのではないだろうか。それは、一面では日露戦争当時の戦争に対する反応の仕方において示されたものであったかもしれない。トルストイは非戦を唱えた。藤野先生はどうであったろうか、彼は或いは反戦でなかったかもしれぬが、少なくともこの作品に描かれた「幹事等」の軽薄さはなかったであろう。重要なのは戦時であれ何であれ職務に忠実であること、世の中がどうであれ、相手が無名であれ有名であれ縁あって自分が担当することになった留学生魯迅にしっかりと医学を教えること、そういう頑固でひたむきな態度に魯迅は感動もし学ぶべき美質として感じるものがあったように思われる。晩年、魯迅は胡今虚あての手紙（1933年10月7日付）の中で、「文学をやる者は、（一）堅忍（がんこ）、（二）認真（まじめ）、（三）韌長（ねばり）がありさえすればよいのです」と述べている。あるべき文学者と藤野先生像とは、魯迅において、一体であったといえよう。

二

トルストイの所謂「ロシアと日本の皇帝にあてた一通の手紙」は、前述の『魯迅全集』の「原注」に指摘されているように、ロンドン『THE TIMES』1904年6月27日の第4,5面に掲載されている³⁾。当該のトルストイの文章の見出しは次のようである。

COUNT TOLSTOY ON THE WAR.

“BETHINK YOURSELVES!”

(TRANSLATED BY V. TCHERTKOFF AND I.F.M.)

“This is your hour, and the power of darkness.” (Luke xxii., 53.)

(No Rights Reserved.)

は失われたものとされていたが、1951年紹興で発見された。内容は病理学、脈管学、解剖学、有機化学、五官学および組織学にわたり、全6冊954頁におよぶ。これらのノートには担当教師による添削が施されているが、中でも作品「藤野先生」で知られるこの解剖学ノートに施された藤野先生の添削はもっとも精密なものである。」とあり、医専での添削が藤野先生だけでなく担当教師全員による組織的な指導の手が加わっていたように思われる。

3) 英訳の末尾は、「LEO TOLSTOY./Yasnaya Poliana, May 21 1904.」と記されている。

上記の英文は、(*)『L.N. TOLSTOI Polnoe Sobranie Sochinenii』1936 年第 36 巻掲載のトルストイのロシア語の論文《ОДУМАЙТЕСЬ!》(反省せよ! 或いは、考え直すべし! の意)の訳文である。「戦争論」というこの英訳タイトルは(*)の「解説」によれば、はじめトルストイが草稿の段階で日記に記していた題名《О войне》と同じ意味であり、また、イギリスの『自由言』社から『反省せよ!』を出版(後述)した際に、『自由言』社の編集者が副題として付したものである⁴⁾。ロンドン『THE TIMES』に載ったこの“COUNT TOLSTOY ON THE WAR.”は間を置かず日本に紹介された。次のような(a)~(c)のおよそ3種類の邦訳が行なわれ、また、ほぼ同時に英訳の原文「トルストイ伯非戦論」(COUNT TOLSTOY ON THE WAR.)が雑誌『時代思潮』第8号(明治37年9月5日発行)の「附録」欄に転載(REPRINTED FROM THE TIMES MONDAY, JUNE 27, 1904)された。

(a) 『東京朝日新聞』明治37年8月3日~8月20日(7日, 13日, 18日, 19日の4日間を除く)まで「トルストイ伯日露戦争論」(第一章~第十二章)のタイトルで14回連載される。杉村「楚人冠」訳⁵⁾。

(b) 『平民新聞』第39号(明治37年8月7日)掲載の「トルストイ翁の日露戦争論」。訳者は

4) 本学図書館所蔵のロシア語版テキスト及び「解説」の解説には、本学経済学部ロシア語担当の吉川宏人助教授のご指教を賜りました、ここに謝意を表します。なお、吉川助教授によれば、ロシア語版テキストの「解説」には、トルストイの該論は、1906年に、はじめてロシアにおいて『再生』社より分冊で出版されたが、すぐに当局に没収されてしまった、という記述があるとのこと。

5) ①、8月3日、第3面「トルストイ伯日露戦争論(一)第一章」※1/②、同4日、第3面「同(二)第二章」/③、同5日、第3面「同(四)第四章」※2/④、同6日、第3面「同(四)第四章」/⑤、同8日、第3面「同(五)第五章」/⑥、同9日、第3面「同(六)第六章」/⑦、同10日、第3面「同(七)第七章」/⑧ 同11日、第3面「同(八)第八章」/⑨ 同12日、第3面「同(九)第九章」/⑩ 同14日、第7面「同(十一)第十一章(上)」※3/⑪ 同15日、第7面「同(十二)第十一章(下)」/⑫ 同16日、第7面「同(十三)第十二章の一」/⑬ 同17日、第7面「同(十四)第十二章の二」/⑭、同20日、第3面「同(十五)第十二章の三」※4

※1 ① 8月3日の「第一章」の冒頭には、英訳原文の「BETHINK YOURSELVES」は訳されていない。次のような前書きが付されている。「トルストイ伯の日露戦争論は六月二十六日の倫敦タイムス紙上約十欄を埋めたる一大長篇にして伯が心血を凝げる近時の大作と称せらる其の露国を罵り日本を罵れる処筆鋒鋭利当るべからず此の文一たび出で、伯に対する攻撃非難の声盛に露国内に起り一時相当の処罰を伯に加へんとの議もありしが幸にして竟に其事なくして已めりといふ又以て其如何に露国の人心に深大なる感動を与へたるかを知るに足る今之訳するに当りて原文は玉の如く訳文は瓦の如しなど断らんも余りに古めかしかるべきか(楚人冠)」

※2 ③ 8月5日と ④ 6日は「第四章」で同じ文章である。恐らく ③ 5日は「(三)第三章」が載るべきであったのだろうが、掲載されなかった。

※3 8月13日には「(十)第十章」が載るべきところ、掲載されなかった。

※4 ⑭ 8月20日「(十五)第十二章の三」までで掲載が打ち切りになったが、最終章である「第十二章」の残り11分の3が未掲載となった。

6) 訳文の冒頭に次のような序文が付されている。「トルストイ翁が、日露戦争に関して、去六月二十七日の倫敦タイムス紙上に約十欄を填むるの長論文を公けにせりとの電報は、世界万国を刮目せしめ、皆な鶴首して其論旨如何を知らんと要せり、今や吾人其全文を接手して之を読むに、其平和主義博愛主義の立脚地より一般

無署名だが、幸徳秋水、堺利彦の共訳⁶⁾。

(b') 平民社訳『トリスの日露戦争論』(文明堂発行、明治37年9月12日)、東京文明堂・信陽堂発兌⁷⁾。

(c) 加藤直士訳『トリスの日露戦争観』(日高有隣堂発行、明治37年8月20日)⁸⁾。

以上、ロシア語版テキスト及び当時のトルストイの「ON THE WAR.」の邦訳と英訳原文の転載からみて、上記の魯迅「藤野先生」の「手紙」は手紙ではなく、「戦争論」(乃至は「戦争観」、「非戦論」)であることがわかる。ただし、ロンドン『THE TIMES』英訳末尾の欄外に次のような訳者の注釈がある。これは「ON THE WAR.」第12章に引用されているトルストイあての水夫の「手紙」(The letter)の注釈である。

The letter is written in a most illiterate way, filled with mistakes in orthography and punctuation. (Trans.)

三

次に問題になるのは、「論」或いは「観」であるはずの「ON THE WAR.」を、魯迅はなぜ「ロシアと日本の皇帝にあてた」「手紙」と書いたのかということであろう。上記『THE TIMES』訳者の“The letter”の一文を、魯迅が『時代思潮』第8号に転載された英文で読んでいた可能性はあるであろう。しかしその「The letter」をトルストイあての水夫のものでなく、いつしか「ON THE WAR.」自身を指すと勘違いしてしまったという可能性はそれほど高くはあるまいが、今その事実を確かめるのは困難である。また、「藤野先生」の「ロシアと日本の皇帝にあてた」という表現は、も

戦争の罪悪と惨害とを説き、延て露国を痛罵し日本を排撃する処、筆鋒鋭利、論旨生動、勢ひ当る可らず、真に近時の大作雄篇にして、一代の人心を覚醒するに足る者あり、即ち匆忙秃筆を駆て此に其全文を訳載し、広く江湖に薦む、但だ吾人の不才、加ふるに原文の一字一句を脱せざるを力めたるが為めに、筆端窘束、金玉を化して瓦礫となすを憾むのみ、若し夫れ本篇に対する吾人の意見は次号に於て叙説する所ある可し

- 7) (b) (新聞掲載)と(b') (単行本)とは、文章上字句の異同がある。また、(b)には漢字にルビが付いていないが、(b')には全ての漢字にひらがなのルビが付してある。(b')の奥付には「複製又は転載随意」や「定価金八錢郵税金二錢」「進物用最適當也。多数入用の方には割引あり」の記載がある。
- 8) 該書の末尾に「附録」として、「トルストイ伯時局談」「トルストイの日露戦争論に対する倫敦『タイムス』の批評《国民新聞より転載》」が載せられている。訳者の加藤直士について、当時の『平民新聞』第40号(明治37年8月14日)の「●ト翁と日本の論壇」という見出しの欄に次のように評されている。「▲別に我等に奇異を感じて起させたのは、トルストイ翁の崇拜者として紹介者として反訳者として名高い加藤直士が『新人』雑誌紙上に自分が、戦争論者たることの言訳を書く其筆序でに、日本の非戦論者を罵り居ることである/▲加藤君も亦、ト翁の非戦論は善いが、日本人の非戦論は悪い、日本の非戦論者が主戦論者に対して非人道と罵り、悪魔と叫び罵詈するものは、ト翁の精神とは違ふのだと書いて居る、併し世に反対論者を罵詈することト翁の如く酷烈な者はあるであらう歟/▲加藤君は更に、日本の非戦論者は、軍人や其遺族の悲惨や災厄に同情せぬから、非人道没道義だと怒つて居る、彼は何を根拠として、そんなことを言ふかは知らぬが、軍人や遺族や其他一切の悲惨災厄が、見るに忍びねばこそ、非戦論も出て来るではない歟、」

ちろん上記の“The letter”一文には記されていない。魯迅の意図的な曲筆か、または記憶違いによるかする「手紙」及び「ロシアと日本の皇帝にあてた」という記述は、どこから発想されたものであろうか。

「藤野先生」が執筆された、その約二年後の『『奔流』編校後記「七」』（末尾に「一九二八年十二月二十三日、魯迅記。」とある該篇は同年十二月三十日の『奔流』第一卷第七期に発表された。1981年人民文学出版社版『魯迅全集』第七卷『集外集』所収）の中で魯迅は、トルストイについて次のように書いている。

この十九世紀のロシアの巨人について、中国でも数年前に紹介する人がいたが、今年は誰かが罵った。しかし、中国における彼の影響は、実際はゼロに等しい。彼の三大著作のうち、『戦争と平和』はいまだに翻訳する者がいない。……彼の著作については、中国では以上の通りである。行動に至っては、さらに寒々としたものである。我々には書店を経営し、洋館を建てる革命文豪はいるが、田畑を農夫に分け与えてやる地主はいない——なぜならこんなことをするのは「浅薄な人道主義」だからである。「出版の自由」をおねだりする「作家」兼店主はいるが、皇帝への直訴の手紙を書く愚か者はいない——なぜなら役にも立たないことだからであり、危険だからという訳ではない。「無抵抗」に至っては、中国にも存在している、しかし、それは主義に基づいてやっているのではなく、状況や相手に応じて変化し、時にはビンタを食らわすこともあり、また時にはビンタを頂戴することもある。もしもロシアに沢山いる「魂の戦士」(Doukhobor)のように、死んでも兵隊にはならないというような者がいるかもしれないなどと考えるのは、実に「杞憂」というものである。

上に述べる「皇帝への直訴の手紙を書く愚か者」について、『魯迅全集』の編集者は「一九〇四年の日露戦争時期に、彼はかつてロシアのツアーと日本の天皇に宛てた手紙を書いて戦争に反対した」と注している。しかし、この注は少し正確さに欠けているであろう。より正確なものにするには、この注の末尾に続けて次の言葉を補うべきである。「と魯迅は考えていた。だが、事実について若干の訂正が必要である。つまり、トルストイが書いたのは手紙ではあったかもしれないが、一般的には、少なくとも日本では、「手紙」ではなく「戦争論」乃至「戦争観」或いは「非戦論」とみなされていたのである。」と。この魯迅の文章及びその注釈からみて、『魯迅全集』注釈者が「藤野先生」の「手紙」を、意図的な曲筆ではなく恐らく魯迅の記憶違いであると推測していることがわかる。しかし、果たしてこの推測は正しいだろうか。

法橋和彦編「トルストイ年譜」⁹⁾の「一九〇四年（七六歳）」の項には次のように記されている。

「[一月] 二十七日、日露戦争勃発。三十日、日露戦争について論文『反省せよ！』起草。」

「六月十三日、イギリスの「自由言」社から『反省せよ！』を出版、翌日、英独仏紙に転載、日本では「タイムス」紙より幸徳秋水と堺利彦が共訳、「平民新聞」に発表。トルストイの論旨はキリス

9) トルストイ全集別巻『トルストイ研究』（1978年3月、河出書房新社出版）所収。

トの教えにもとづいて戦争に反対し、自国の敗北をよびかけると同時に日本帝国主義が今後日本人にたいする抑圧を強化する事態をうれる。当時学習院の学生であった武者小路実篤と志賀直哉はこれにつよく影響される。」¹⁰⁾

上記の英訳『反省せよ!』とは、“BETHINK, YOURSELVES!”ではじまる「ON THE WAR」のことであり、「藤野先生」にも引用されている「汝、悔い改めよ!」(幸徳・堺訳及び加藤訳の「爾曹悔改めよ!」)であるだろう。この「トルストイ年譜」によれば、皇帝にあてたものか否かは不明であるが、『反省せよ!』は形式上は「論文」であり手紙ではないことがわかる。

ところで、晩年(「一九三四年十月十六日夜、魯迅、上海にて記す」と結ばれている)に書いた『准風月談』後記で、魯迅は「しかし私はヨーロッパ戦争の時(原文「欧戦時候」)に彼が皇帝を罵った手紙を読んだことがある」と思い違いしている。もちろん「ヨーロッパ戦争の時」はトルストイ(1828~1910, 11)の没年を考えれば、『魯迅全集』編集者の注の指摘するように、日露戦争時期の可能性が高い。とすれば恐らく確証がないので断定はできないが、上の「ON THE WAR」を指していることになる。ただし、トルストイはロシアの皇帝あてに何度か書簡を書いており¹¹⁾、それらの書

10) イギリスの『自由言』社から『反省せよ!』がどのように出版されたか不明であるが、1904年「5月15日」付の「V・G・チェルトコフ」あてトルストイ書簡の次のような記述は若干の資料にはなるであろう。「君はエビグラフ(その頃英訳された論文『考え直すべし!』のエビグラフ)の翻訳の一節で難問を私に課したね。努めてやってみよう。これはしなければいけないとぼんやり感じてはいたのだ。その時翻訳をしなかったのは私が悪い。」(1973年11月、河出書房新社、中村融訳『トルストイ全集/日記・書簡』第18巻所収)。なお、記者の一人のチェルトコフについて、1904年9月『時代思潮』第8号所収の「ONN THE WAR」の脚注に、「Editor of the Free Age Press, Christchurch, hants, and 13. Paternoster-row, London.」とある。

11) 法橋和彦編「トルストイ年譜」(同上注9)所収)によれば、以下のように、トルストイはロシア皇帝宛てに5回ほど書簡を送っている。

第一回は1881年3月下旬、「三月二日(引用文の日付はすべて旧ロシア暦)、アレクサンドル二世暗殺を知る。中旬、アレクサンドル三世に宛て暗殺にくわわった革命家たちを処刑しないよう要請文を書く。検事総長ポベドノースツェフ、その伝達を拒否、ストラホフの奔走で四月三日の処刑よりまえにトルストイの上申書、皇帝に渡される。」

第二回は1894年1月中旬、「一月二、三日、ザカフカースへ追放された社会主義者、革命家ヒルコフから子供たちをとりあげるといった非道な措置を容認したアレクサンドル三世に手紙をおくり、人倫にもとると非難すると同時に、検事総長にも子供をヒルコフの妻のもとに帰すように訴える。」

第三回は1897年5月下旬、「五月十日、ニコライ二世に手紙をおくり、サマールラ県のモロカン教徒の子弟を隔離したり、信仰を迫害したりすることはロシアの恥辱であると抗議する。」

第四回は1901年4月上旬、「三月、出版局はトルストイの〔ギリシャ正教会〕破門に同情を表明する一切の記事をさしとめる。十五日、檄文『皇帝とその助力者たちへ』完稿(二十六日にニコライ二世に送る)。」

第五回は1902年1月~3月間、「[一月]十三日、ニコライ・ミハイロヴィチ公爵、五日付のトルストイの依頼状にたいし、手紙を皇帝に手渡すことに同意。」「[一月]十六日、『ニコライ二世への手紙』を脱稿、国民が希望をのべ、困窮を訴えることを妨げている政府の苛酷な圧制、農民の貧窮、飢饉、広汎な階層の政府への不満と敵意を論じ、専制政治の撤廃、移住と教育と信仰の自由、土地私有の廃止を要求。」「[二月]二十四日、ニコライ二世、トルストイの手紙に好意を示し、他人に見せぬことを約束。」

また、二回嘆願を行なっている。はじめは1879年4月上旬、「三月下旬、投獄されている三人の旧教主の釈放をアレクサンドル二世に嘆願。」、次は1898年4月、「四月二日、流刑者をふくむドゥホボール教徒全員に海外移住の許可を皇帝〔ニコライ二世〕にもとむ。」

簡を指しているとも考えられ、この『魯迅全集』編集者の指摘は類推の域を出ない。とはいえ、「皇帝を罵った」というのと「ロシアと日本の皇帝にあてた」というのは、事実の上で大いに異なっている。いずれにせよ、当該注釈は再考を要することになるであろう。

四

では、日本留学当時の魯迅はどうであったのだろうか。果たしてそれを、「ロシアと日本の皇帝にあてた」「手紙」とみなしていたのだろうか。

1908年12月『河南』第8期に魯迅の「破悪声論」（未完）が掲載された。この評論は、仙台から戻った魯迅が東京で行なった文学活動の成果の一つである。この評論の中で、魯迅はトルストイについて、彼への共感と批判をこめて、次のように言及している。

(ア) 近世に至りて、則ち別に天識の人⁽¹⁾に在ること有りて、虎狼の行いは、其の首事に非ざるを知る。而して此の風為に稍殺(そ)がる。特下士に在りては、未だ脱する能わざるなり。識者之を憂うる有り、是に於いて兵を悪むこと蛇蝎の如く而して平和を人間(じんかん)に大呼せり、其の声も亦心曲を震わせり。預言者托爾斯泰は其の一なり。

(イ) 其の言に謂えらく人生の至(はなはだ)貴ぶ可き者、自ら力に食みて生活するに如くは莫く、侵掠攻奪は、大禁為るに足る、下民平和を樂しまざるは無きも、而も上に在る者乃ち血を喋(ふ)むを愛し、之を駆りて戦いに出だしめ、人民の元を喪う。是に於いて家室完からず庇無き者全国に遍く、民其の所を失うは、政家の罪なり。何を以てか之を棄せん? 命に奉ぜざるに如くは莫し。出征を令するも士集まらず、仍(なお)耒耜を乘(と)りて耕すこと、熙熙たり。捕治を令するも吏集まらず、亦た仍お耒耜を乘(と)りて耕すこと、熙熙たり。独夫は上に孤立し、而して臣僕は下に命を聴かざれば、則ち天下治まる。

(ウ) 然れども平議以て是(ぜ)に非ずと為す、載(すなわ)ち全俄をして朝に是の如くせば、敵軍則ち以て夕べに至らんとする可く、民の朝に戈矛を足次に棄て、夕べに迨(およ)べば則ち其の土田を失い、流離散亡すること、前此より烈ならん。故に其の言う所、理想為るは誠に善なるも、而も諸を事実より見れば、乃ち初志に佛戾すること遠し。

(エ) 第此れ猶僅かに之を揆(はか)るに利害の言と曰うがごとし。人類の不齊を察すれば、亦当に斯言の至に非ざるを悟るべし。夫れ人の進化の道途を歴し、其の度は則ち大いに差等有り、或いは蛆虫の性に留まり、或いは猿狼の性にして、縦(たとえ)万祀を越えるも、大同となること能わざらん。即(たとい)同となるも、一異者を見るや、全群の治は立(ただ)ちに敗れん。民の性柔和なること、既に乳羔の如ければ、則ち一狼其の牧場に入るや、能く之を殺し遺子無からしむ、是の時に及びて保障を求むるも、遅莫を悔いるのみ。是の故に殺戮攻奪を嗜(た)しなみ、其の国威を天下に廓(ひろ)げんと思ふ者は、獸性の愛国なり。人は禽虫を超えんと欲すれば、則ち当に其の思いを慕うべからず。顧(おもう)に戦争の迹を絶ち、平和の永存は、乃ち又須く之を人類の滅尽、大地の崩離以後に遅らすべくして、則ち甲兵の寿は、蓋し又人類と与に終始を同じくする者ならん。然れども此れ特に自ら捍衛し、虎狼を闢(しりぞ)く

所以にして、之を假りて爪牙と為し、以て世の小弱を殘食せず、兵をして人の用と為し、而して人に強いて兵奴と為さざれば、人此の義を知らば、乃ち庶（ほとんど）与に武事を語る可し、而らば両間の大厲を為すに至らざらん。

魯迅は進化論を抛り所にして（エ）につづけて、トルストイの兵役拒否の無抵抗主義を批判して、自衛のみに限り軍備の必要性を説くのであるが、上記「破悪声論」の文章（ア）で、トルストイを「兵を悪むこと蛇蝎の如く而して平和を人間に大呼」せる「預言者」という。もちろん、この指摘は、ロンドン『THE TIMES』に載せた「ON THE WAR」を含ませたの謂いであろう。しかし、魯迅はトルストイの当該論文の名前を明記していないばかりか、「手紙」であることを記していない。当時の魯迅にとってこの文章の形式は自明のものであり記すまでもなくそれよりは内容の方が重要であったからではあるが、断定はできないが、この時点での魯迅が「戦争論」を「手紙」とみなしていなかったのではないかと推測することは許容されるのではなかろうか。『平民新聞』第39号にトルストイの「戦争論」が掲載されて僅かに四年余しか過ぎていないからばかりではなく、「人間に大呼」するのと「皇帝」（日本ではなくロシアの）にあてて「手紙」を書くのとでは若干、否、甚だしくニュアンスが違うのではないと思われるからである。強権に齒向かう点では同じでも、皇帝宛ての「手紙」の方がより過激であり、危険であり、無鉄砲であり、事実はどうあれその意味でよりトルストイらしいであろう。この時点での魯迅はそういうトルストイ像ではなく、「平和を人間に大呼」した事実に基づいて記述しているとみてよいのではないだろうか。つまり、日本留学時期の魯迅は「手紙」ではなく「戦争論」とみていた、と考えるのである。

五

ここで一先ず「ロシアと日本の皇帝にあてた」か否かの考察を後に譲ることにして、魯迅はなぜ「藤野先生」の中で「手紙」と書いたのかについて考えてみよう。

1907年1月7日～11日までの五日間にわたって『大阪毎日新聞』に「杜翁の支那人に與ふるの書」が連載された。1月7日付の当該記事の前書きには「本文はトルストイ翁が過般佛文にて起草し「クーリアー、ユーローベアン」紙上に寄書したるものをノウオエ、ウレミヤが再び露文に翻譯したるものなり」とある。

トルストイのこの手紙は、森時彦氏によれば¹²⁾、「トルストイに英文自著『総督衙門からの手紙』Papers from a Viceroy's Yamen を献呈した辜鴻銘に対する礼状であるが、その謝意を述べた後に、中国が進みゆくべき途について、彼独特の観点からする見解を、縷々述べている」とし、「西洋を模倣して、代議制度、工業化政策をとりいれて近代化をはかろうとしていた中国人に、その愚かしさをいませめたトルストイの主張」の「論理の運びは、一貫して、質素な農業

12) 森時彦「民族主義と無政府主義——国学の徒、劉師培の革命論——」（小野川、島田編著『辛亥革命の研究』（昭和53年1月、筑摩書房）所収）。

生活に人間の真実の生き方をみとめ、西洋近代の虚偽性と欺瞞性を憎悪してやまなかったトルストイの思想を、遺憾なく表明している」というこの手紙の中心テーマが、「中国の革命派に対する批判であり、1905年の中国同盟会の結成後の「意気あがる革命派の活動に、あたかも冷水を浴びせるがごとき内容であったが、従来ロシア虚無党あるいはテロリズムとしてしか、中国人に知られていなかったアナキズムの、純粋な無政府の理想からする正面からの批判であったゆえに、また日露戦争中の反戦論でもって、すでに東洋の人々にも知られていた、偉大なロシアの思想家が中国のためにおくった真摯な批判であったがゆえに、革命派の人々もこの書簡を黙殺することはできなかつた」と指摘している。

同じく森氏は、革命派、特に無政府主義者への影響について次のように述べている。

「この書簡に最初に注目したのは、宋教仁であった。民報社で『大阪毎日新聞』を閲読していて、この書簡を目にした宋教仁は、その時の模様を『我之歴史』に書きのこしている。それによると、張継がこれを訳して『民報』に掲載することを発議したが、翻訳する人がいなかったため、宋教仁みずから翻訳にとりかかったという。もっとも、この翻訳は完成しなかつたらしく、『民報』には結局のらなかつた。が、このような次第であるから、民報社に出入りしていた人々の間では、この書簡が広く読まれていたことが十分予想できる。そして数カ月後に表面化した同盟会の内部対立の中で、このトルストイの批判は、一部の同盟会員たちに支持され、孫文派に対抗して、無政府革命を唱えるグループの論理に援用されることとなった。」¹³⁾

張継や劉師培などの当時の日本における無政府主義者たちの雑誌『天義』には、トルストイの「支那人に與ふるの書」に関する次のような翻訳や広告記事等の(a)、(b)、(c)が載った。すなわち、(a)「忱芻」訳の「(譯叢) 俄杜爾斯托致支那人書節譯」(第11・12冊合冊、1907年11月30日)、(b)以下のような「本社重要廣告」記事、すなわち「本報下冊彙列新譯各書成一最巨之冊其目如左、……(前略)、六、俄国革命之趣旨、杜爾斯讀著、七、致支那人書全稿(全上)」(第15冊、1908年1月15日)、(c)「(譯書) 俄国革命之趣旨、杜爾斯德 Tolstoy 著」「致中国人書、杜爾斯德 Tolstoy 著、忱芻譯」(第16~19、春季増刊号、1908年3月15日)。(a)は要旨を紹介したもの、(b)は広告記事、そして(c)は英文から「第4節」までを中国語に翻訳したものである。

さて、以上のトルストイの「支那人に與ふるの書」を、当然魯迅も読んでいたことであろうと思われる。なぜなら、上の森論文の指摘にあるように、およそ民報社に出入りしていた留学生ならこの「書」のことを知っていたはずであろうし、しかも、この「書」(手紙)の次のような箇所は、上に引用した魯迅の「破惡声論」中の(イ)の文章の材源の一つになっていると考えられるからである。

- (1) 「歐人の征服を防禦する」方策は、「須く先づ現在の政府への服従を拒絶せざるべからずして同時に改革派有識者輩の要促しつゝあるものを行はざるに在り」「而して吾等(ロシア人)の採るべきは唯一途」「曰く吾等に対抗する暴力に煩はさるゝなく又其狂暴の

13) 同注12)

群中に加はることなき平和なる農業生活を営むことは是れなり」(第七章)

また、上記の「日露戦争論」(第十二章)の次のような一節(2)も、「破悪声論」中のトルストイに関する記述(イ)のもう一つの材源になっているであろう。

(2)「嗚呼何れの時にか此事止むべき、而して欺かれたる人民が遂に己れに返りて、何れの時にか能く左の言を發すべき、「汝、心なき露国皇帝、〇〇皇帝、大臣、牧師、将官、記者、投機師、其他何と呼ぶるゝ人にもあれ、汝等自ら彼の砲弾銃弾の下に立てよ、我等は最早行くを欲せず、又決して行かざるべし」「願はくば我等を平和の中に置け、我等は耕作し、播種し、建築し、而して又汝等を養ふべし、汝懶惰なる者よ」予備兵の名称を附せられたる稼人を奪ひ去られて、数万の母と妻と子供とが泣き叫ぶ声、国中に響き渡れる今日、是れ豈に自然の要求に非ずや」

もちろん、上の(1)と(2)の内容が類似しており、魯迅がそのどちらか一つだけを材源にしよう一つを読まなかった可能性は或いは非常に少ない確率で考えられるかもしれないけれども、しかし、『大阪毎日新聞』乃至は『天義』に掲載された文章を読むかまたは伝聞かによって、何れにしても少なくとも何らかの方法でこの「書」の内容を知っていたと推測してよいのではないかと思う。とはいえ、文章のもつ迫力或いは「破悪声論」以後の魯迅の言及の有無からみて(その後も魯迅には「支那人に～」に関する言及がないように思われる)、魯迅に与えたインパクトは「日露戦争論」の方が格段に強かったように推測される。なお、(2)の「〇〇皇帝」の英訳原文は「Mikados」(ロシア語版は микады, 複数形)であり、また他の箇所では「the Mikado」(同じく、Микадо)と記しており、日本の明治天皇を指す。

六

ところで、魯迅は広州から上海へ移ってまもなく、「藤野先生」執筆の翌年に、講演を二つ行なっている。一つは1927年10月25日に上海の労働大学で行なった「知識階級について」(関於知識階級)¹⁴⁾であり、もう一つはやはり1927年12月21日に上海の暨南大学での「文芸と政治の岐路」(文芸与政治的歧途)¹⁵⁾である。この二つの講演で魯迅はトルストイについて次のように言及している。

まず、「知識階級について」では、次のように述べている。

イギリスのラッセル(Russel)とフランスのロマン・ローラン(R. Rolland)が欧州戦争に反対したことを、皆は称賛しましたが、幸いにも実際は実行されませんでした。もし彼ら二人の

14) 1927年11月上海労働大学『労大周刊』第5期に発表。

15) 記録原稿は1928年1月29,30日、上海『新聞報』「学海」第182,183期に発表された。

言うことが実行されていたら、ドイツはとっくの昔にイギリスとフランスを攻め落としていたでしょう。なぜなら、二人の説はドイツがイギリス、フランス二国と同時に戦争を放棄しなければ、効果がないからなのです。ロシアのトルストイ (Tolstoi) の無抵抗主義が実行されないのも、同様な理由からです。彼は悪を以て悪に報いることを主張しませんでした。① 彼の考えはこうです。つまり、皇帝が兵隊にさせようとしても、私たちは兵隊にならない。警察に捕まえさせようとしても、警察は捕まえないし、首切り役人に殺させようとしても、役人が殺しに行かないという具合に、皆が皇帝の命令を聞かなければ、皇帝もつまらない、だから、皇帝になるのも面白くないので、天下は太平になる、というのです。しかし、もしも生憎一部の人間が皇帝の話聞いてしまえば、そううまくはいきません。

上の引用文の中で魯迅は、トルストイの無抵抗主義が実行されない理由を述べているのであるが、この講演の前後からみて、必ずしも全否定されている訳ではない。この引用の少し前で魯迅は、知識と強権は衝突し、両立しない、強権は人民の自由な思想を許さない、なぜならそれを許せば力が分散してしまうからである、と述べている。この強権の力が分散する例として上のラッセル、ロマン・ローラン、トルストイのことが挙げられているのである。この引用の後で魯迅は、現在思想の自由と生存の間にはなお衝突があり、それは知識階級の欠点だが、それでは知識階級は今後どうなるか、指揮刀の下で命令に従うかそれとも民衆の側に立った思想を發表するか。もしこのことについて意見を述べろというなら、やはり考えたことを自由に言えなくてはならない、と思う。真の知識階級は利害を顧みないもので、利害を顧みるのは偽の見せかけの知識階級である。今日と明日で異なった意見を發表するような進歩の速さを真の知識階級はできない。彼らはいつでも社会に不満であるが、彼ら自身も苦しんでいるのである、彼らは将来の犠牲となることを覚悟しているし、社会としても彼らがいるおかげで活気があるのである。このような講演の前後関係からみて、上のトルストイの例は一見全否定的な例のように思われるが、実はそうではなく、民衆の側に立ったト翁の強権との衝突の例であった。もちろんトルストイの無抵抗主義の欠点を指摘してのことではあるが。丸山昇氏によれば¹⁶⁾、この時期、広東での国民党の四・一二反共クーデターを目撃したばかりの魯迅は、その後の広東での国民党御用文学者吳稚暉等による「指揮刀の援護の下に」「強者暴者に対する」のではなく「敗北者に対する革命（共産党弾圧を指す）」を提唱した〈革命文学〉、言い換えれば「蒋介石反動の虚妄の「革命」」及びその御用文学を「全身で拒否し、それに抗って」いたという。この講演でトルストイと対比されている「偽の見せかけの知識階級」は吳稚暉等を指しているのである。次に、「文芸と政治の岐路について」を見てみよう。

生活に困っていた人が一度お金持ちになると、容易に二つの状況に変わります。その一つは理想の世界を作ろうとして、同じような境遇の人の身になって考え、人道主義に変わるものです。もう一つは何でも自分で稼いだものであるからとして、それまでの苦勞が、その人を何に

16) 『魯迅と革命文学』(1972年1月、紀伊国屋書店)「第一章 魯迅と「清党」」参照。

対しても冷酷にさせ、個人主義に流れるものです。私たち中国では個人主義者になる方が多いと思われまゝ。人道主義を主張する人は、貧乏人のために方法を考えたり現状を改革しようとするので、政治家から見れば、やはり個人主義の方が良いのです。ですから、人道主義者は政治家と衝突します。ロシアの文学者トルストイは人道主義を唱え、戦争に反対し、三冊の分厚い小説を書きました——つまり、あの『戦争と平和』です。彼自身は貴族でしたが、戦場での経験がありました。そこで彼は戦争が何とも悲惨なものであると感じたのです。とりわけ彼は長官の鉄板（戦場で重要な将校は皆弾避けとして鉄板があった）の前に臨んだ時、更に胸を刺すような痛みを感じました¹⁷⁾。そして、彼はまた彼の友人たちの多くが戦場で犠牲になっていく姿を目のあたりにしたのです。② 戦争もやはり人間を二つの態度に変えます。一つは英雄です。ある人は他人が死んだり、傷ついたりしたのを見て、自分だけが元気に生きているので、自分はどんなに優れた人間であるかと思い、あれこれと戦場での勇猛さを自慢するようになります。もう一つは戦争反対者になり、世界で再び戦わないことを希望するようになります。トルストイは後者です。無抵抗主義を以て戦争の消滅を主張しました。彼がこのように主張するので、政府は当然彼を嫌いました。戦争反対は、ツァーの侵略欲と衝突しますし、③ 無抵抗主義を主張するというのは、兵士が皇帝のために戦わないように、また、警察が皇帝のために法律を執行しないように、そして、裁判官が皇帝のために裁判しないように、要するに皆が皇帝を持ち上げないようにすることなのです。皇帝は誰からも持ち上げて貰いたいものなのですが、誰も持ち上げようとしなければ、皇帝になどなってしまうでしょう。とすれば、やはり政治と衝突してしまいます。こういう文学者が出てきて社会の現状に対して不満を抱き、これやあれやと批判しますと、社会の一人一人が目覚めてきて、安んじなくなってくるから、当然、首を斬らなくてはならなくなるのです。

この講演も上の「知識階級について」同様、「蒋介石反動が進行している中で行なわれた」¹⁸⁾ものであり、「文芸と政治」の「政治」も当時の具体的な状況を指しているであろう。ところで、上記下線部分の①、③は、前述した「破悪声論」の(イ)に類似し、②は、次のような「日露戦争論」（第十二章）の一節を想起させる。

17) 魯迅は1935年6月28日付の胡風宛て書信の中で、魯迅に相談したいことがあるという葉紫の手紙を魯迅が受け取ったが、自分は外出したくないと述べ、次のように「我々の元帥」である周揚（当時の左連の共産党・共産主義青年団の書記）の態度を批判している。「戦いに出る兵隊は危険など顧みもしなかった、しかし、大将の目の前の弾避け用の鉄板を見たときに、自分のことに思いが及び、胸がドキドキしてそれ以上前に進めなくなってしまった、という話をトルストイの何かの小説で読んだことがあるのを思い出しました。しかし、もし元帥（周揚を指す）が生命の価値はそれぞれに異なると考えているとしたら、私には言うべき言葉もありませんが、「軍棍」（軍隊内の無頼漢の意か、とすれば魯迅自身を指す、魯迅の造語？）は殴られるよりほかないのです（或いは「軍棍」（軍紀を肅正する棍棒）で殴られるよりほかないのです、の意か）。「長官の鉄板の前に……」はトルストイの小説が出典らしいが、詳細は不明。

18) 同注16)。

世には真個の英雄あり、彼の他人を殺すのみにして自身は決して殺されざれしといふを以て、世人の爲めに祭祀せらるゝ英雄にあらずして、彼の絶対に殺人者の列に伍するを肯ぜず、耶蘇の法則に違背せんよりは寧ろ道の爲めに殉するを甘んじて牢獄に入り、若くばヤクーツクの辺地に配竄され居れる英雄なり、

さて、魯迅のトルストイ言及をめぐる、一つの特徴は、無抵抗主義、宗教家など否定的側面を持ちつつも、平和を叫び、圧政者の不正を暴露し、批判するというトルストイと、魯迅の批判すべき誰かとを比較、対比するという構図をもつことである。魯迅にとってトルストイは一方で役にも立たぬ無抵抗主義を振りかざすけれど、もう一方では平和のために強権に立ち向かう恐れを知らない良心的な偉大なる「愚か者」という矛盾する側面をもつ文学者の偉大なモデルであった。たとえば、1928年3月「酔眼中の朦朧」（『語絲』第4巻第11期）でも、魯迅は「人〔レーニンを指す〕の真似をしてトルストイを「下劣な説教者」と称したりするが、だが中国の「目前の情況」に対しては「事実において社会各方面も暗雲垂れこめる勢力の支配を受けている」と感じるだけで、彼の「政府の暴力や裁判、行政の喜劇的仮面を暴露」した数分の一の勇氣もないし、また人道主義が不徹底であることは知っているが、「人を殺すこと草の如きも声を聞かざ」る時に人道主義的な抗争さえしない」と、創造社の馮乃超を揶揄している¹⁹⁾。

七

以上、トルストイの「ON THE WAR.」の邦訳「日露戦争論」及び同じくトルストイの「杜翁の支那人に與ふるの書」を紹介し、また「藤野先生」執筆後の魯迅のトルストイ像を考察してきたが、本稿の結論は次のようになろうか。

まず、1)、「手紙」についてである。この点についてはそもそもトルストイのロシア語原文が「論」か「手紙」か、また英訳は、そして邦訳はどうかの三段階の分析が必要であったが、ロシア語版テキスト『反省せよ!』も、邦訳「日露戦争論」などもいずれも形式的には「手紙」ではなく「論」で

19) なお、1928年はトルストイ生誕百年にあたり、この年の10月10日発行の『東方雑誌』第25巻第19号に「トルストイ生誕百年記念」特集が組まれたりして、何かとトルストイが話題になったようである。

20) 片山潜が1933年3月『カー・イー』第78号に載せた「日本におけるマルクス主義の誕生と発展の問題によせて」と題する論文で、「『平民新聞』第1号〔1903年11月〕に発表された声明」における「反戦宣伝は日露戦当時『ロンドン・タイムズ』〔1904年6月〕に掲載されたレフ・トルストイの手紙の影響を受け、平和主義の線に沿ったもの」（1960年5月、河出書房新社出版『片山潜著作集』第三巻所収）と乱暴な意見（片山の論理には時間的な矛盾がある）を述べているが、或いはトルストイのこの「戦争論」は公開書簡とみなされるような傾向が当時の知識人一般にあったのだろうか。なお、竹内好が『魯迅文集』第二巻（年月、筑摩書房）でそれまで「書簡」と訳していたのを「公開状」と改めたのは、魯迅の記憶への疑義を示したものでなかろうか。「信」を「書簡」から「公開状」に変更したり、「電影」を「映画」でなく「幻灯」と訳すなど、「藤野先生」邦訳における竹内の翻訳方法の一特徴は、作品内容そのもの乃至作者の意図を重視するのではなく、当時の社会的な情況・事実といった作品外の世界に引き寄せる傾向があるように思われる。なおここで、魯迅の当該箇所表現上の力点乃至特徴がむしろ「手紙」ではなく「ロシアと日本の皇帝にあてた」トルストイの〈勇氣〉の方にあることを確認しておく。

あった。なお、ロンドン『THE TIMES』の欄外注釈に“The letter”とあるが（片山潜の「手紙」発言²⁰はこの欄外注釈から類推して述べたものであろうか）、そのことによって「ON THE WAR」全体を「手紙」とは解釈できない。つまり、トルストイの当該論文は、一般的には「戦争論」として日本に紹介されており、問題は魯迅が果たしてロンドン『THE TIMES』当該注釈を知っていたか否かということになるだろう。確証はないが、魯迅が1904年9月発行『時代思潮』第8号に転載された英訳原文の存在を知っていた可能性は大いにあるであろう。そこで、一つの仮説は、当該英訳において、第12章に引用されたトルストイあての一水夫の“The letter”を、いつしか魯迅が「ON THE WAR」全文を指すと勘違いしてしまった、ということである。そしてもう一つの仮説はこうである。つまり、上記二つのトルストイの文章「戦争論」と「支那人に與ふるの書」（手紙）とを魯迅は、これらの文章に接した後、およそ二十年近くを経るうちに、混同してしまったのではなかったか、ということである。魯迅は「戦争論」を仙台行き直前の1904年8月に東京で読み、「支那人に與ふるの書」の方は仙台から戻って約十カ月後にやはり東京で読んだかまたは聞いたかしたであろう。もちろん、「日露戦争論」自体にも、「論」でもあると同時に「手紙」（原文「信」）でもあるとみなしうるような「平和を人間（じんかん）に大呼」する公開的な内容・趣きを有していることを、魯迅の記憶違い乃至曲筆の前提として考えなくてはなるまい。

次に、2)、「ロシアと日本の皇帝にあてた」か否かについてである。前述のように、トルストイが実際にロシア皇帝に直訴の書簡を何度か送っていたり嘆願をしたりしたという事情も考慮される必要はあるであろう。ともあれ、今のところ確証がなく状況証拠に基づいて判断するしかないが、トルストイが日露戦争当時書いた「論」乃至「手紙」は恐らく「ロシアと日本の皇帝にあてた」ものではなかったのではないかと、「藤野先生」以外にそのことを示す記述が魯迅の他の文章からもまたトルストイに関わる資料からもこの段階では見つからないことからみて、はなはだ心許ないが、記憶違いというより魯迅の曲筆の匂いがするという仮説も成り立ち得る可能性を残している、と考えることができよう。魯迅にとって「論」か「手紙」かそれ自体はあまり重要な問題ではなかったであろうが、しかし、トルストイが「皇帝にあてた」か否かはかなり重い意味があったのではないかとと思われる。そして、「手紙」だから相手は皇帝という道筋で考えるのではなく、逆にも、まず「皇帝にあてた」とみなすなら、次には「論」ではなく「手紙」の形式をとらなくてはならないという考え方も一方では成り立ち得るであろう。もちろん、上の1)同様「戦争論」が日露両国の皇帝をも含ませた形で「人間に大呼」しており、間接的（または内在的）には「皇帝にあてた」と解釈しても或いは許容されるかもしれないが、要するに、魯迅にとって重要なことは、「皇帝にあてた」が事実か否かということではなく、過去の事実に沿って描くということではなく、「藤野先生」執筆時に、そうあるはずだ（乃至そういうことは大いにありうる）というダイナミックなトルストイの姿、つまり、皇帝（強権）にあてて「手紙」を書くという偉大なる「愚か者」の像を描こうとする（或いは描く、つまり「皇帝にあてた」を曲筆でなく事実と信じて描く）ことではなかったか、と思うのである。なお、「藤野先生」が収録されている『朝花夕拾』の諸作品を、意識的な虚構を含まぬ〈散文〉と呼ぶにしろ、細部における虚構を認める〈自伝的回想記〉と呼ぶにしろ、魯迅が過去の事実そのままを書いたというよりは、むしろ、歴史的真相を描いたと解釈すべきではないか、もちろん、そこには、事実ではない曲筆もあるであろう。たとえば、極端な例ではあるが、「藤野先生」を井上

ひさしは小説とみなしている（1991年3月、集英社『シャンハイムーン』の中で魯迅に「藤野殿九郎という先生のことを小説にしたことがあります」と語らせている）。

以上、本稿は「藤野先生」における小説的要素の一つともみなすことができるトルストイの「ロシアと日本の皇帝にあてた一通の手紙」の分析を試みた。ここから伺われるのは、魯迅独自の、老いても墮落せず昂然と敢然と強権に立ち向かうトルストイ翁の像であった。